

名門女子大生

美玲二十一歳

第一卷

全校生徒の前で屈辱の全裸水泳

海老沢 薫 著

内 容

■ 著作権について

■ ま え が き

■ 第一章 高齢者施設でバイト

■ 海老沢薫 B L O G

■ 海老沢薫 Web連載小説

■ 著作権について

「名門女子大生 美玲二十一歳 第一巻 全校生徒の前で屈辱の全裸水泳」(以下本書と表記する)の著作権は「海老沢薫」にあります。

・本書のすべての内容は、日本の著作権法、及び国際条約によって保護されています。

・「海老沢薫」が事前に書面をもって許可した場合を除き、本書の一部、または全部を、あらゆるデータ蓄積手段(印刷物、電子ファイル、ビデオ、テープレコーダー)により複製、流用、転載、転売することを固く禁じます。

・著作権の侵害につきましては、著作権法第119条などの罰則がありますのでご注意ください。

■ まえがき

松岡美玲は、都内にある幼稚園から大学まで一貫教育の名門女子大に通ういわゆる典型的なお嬢様だった。付属の幼稚園からカトリックの教育を受けてきた美玲は、容姿端麗であるだけでなく、その性格もすばらしかった。いつも周りの人を思いやる優しい心を持ち、友達にも恵まれ、家族も仲が良かった。ただ、幼い頃から女性が多い環境で育ってきた美玲は恋愛には奥手で、合コンの誘いもほとんど断り、大学三年生になるまでに付き合った彼氏はたったの一人しかいなかった。そして、その彼氏とも性的な関係は経験しな

いまま別れていた。

美玲は周りの大学の友達が恋愛や異性にばかり夢中になっ

ている中、自分

はもっと人の役に立つことがしたいとずっと思っていた。

そんなある日、大学の構内で偶然見つけた高

齢者施設でのボランテ

ィア活動の張り紙に興

味を抱き、美玲は住宅型老人ホームと呼ばれる高齢者施設で一週間のボランティア活動をすることになる。施設には美玲の祖父母と同じくらいの歳のお年寄り達が大勢暮らしていた。その中で美玲は、一人のお爺さんと出会うのだった。西田と名乗るそのお爺さんは身寄りがなく、人付き合いも苦手なせいで施設の中でも独り孤独に過ごしていた。そんな西田の話し相手になつてあげた美玲に、西田は自分はもう余命わずかなので、できれば死ぬまでに自分の願いを叶えて欲しいとお願ひする。―何でもします―と答えた美玲に、西田が告げたお願いは、なんと美玲の裸を見せて欲しいというものだった。思いがけないお爺さんのおお願いに美玲は最初は拒絶するが、身寄りもなくただ死を待つだけの姿をあまりに不憫に思い、ついに西田の前で裸になる覚悟をする。そして、美玲の美しい裸身を間近で堪能した西田は内に秘めていた欲情を抑えきれ

なくななり、要求はさらにエスカレーターして
った。施設内にある給湯室に素っ裸のまま連れて
行かれた美玲。そこで西田に要求されるまま
体の隅々までを晒している、通りかかった
施設で働く女性職員の北原に見つかってしま
う。
施設の事務所で北原から、給湯室で何をし
ていたのかと問い詰められた西田は、施設か
ら追い出されることを恐れ、美玲が自分の前
で勝手に裸になり、体を見て欲しいと懇願し
てきたのだと嘘の主張をする。濡れ衣を着せ
られてしまった美玲は弁明しようとするが、
余命僅かな西田が施設から追い出されては可
哀想と思いい、自ら罪を被ってしまふのだった。
そして、美玲は女性職員の北原の指示で、
西田の前で全裸のまま土下座すると、屈辱の
謝罪をさせられるのだった。
「この度は、ボランティアで来たにも関わら
ず、私の個人的な趣味で西田様の前で勝手に

裸になり、お尻の穴やオ○ンコまで見せて、不快な思いをさせてしまい本当にすみませんでした。どうか世間知らずのエッチな事しか興味のない淫乱な女子大生がやった事とお許しくださいー

そして、自分よりも若くて美しい女子大生の屈辱の姿を目の当たりにした女性職員の北原は、美玲を徹底的に辱める計画を立てるのだった。

翌日、施設の一階にある食堂は大勢のお年寄り達で溢れかえっていた。皆、ボランテイアの美人女子大生が魅惑のダンスショーを開催すると聞きつけ集まっていたのだ。そこに北原に連れられたバスローブ姿の美玲が現れると、お年寄り達の期待と興奮が最高潮に達した。

食堂の中央に置かれた台座に立った美玲は震える手でバスローブをゆっくり脱ぎ捨てていった。すると、なんと美玲は何も身に付け

ておらず、完全な素っ裸をお年寄り達の前に晒したのだった。

■ 第一章 高齢者施設でバイト

松岡美玲は都内にある有名女子大に通う二十
十一歳の大学三年生だった。彼女の通う学校
は附属の幼稚園から大学までの一貫教育を行
うカトリックの名門校で、美玲は幼稚園から
ずっとその女子校に通う典型的なお嬢様だっ
た。そして、美玲は幼稚園からカトリックの
道徳教育を受けてきたせいにか、正義感が人一
倍強く、誠実かつ温厚な性格で、さらに容姿
端麗でもあり、小さい頃から学校の友人達の
中には美玲の事をまるで女神のように崇める
者さえいた。ただ、そんな美玲も男性には奥
手な方で、大学三年生になるまで付き合った
彼氏はたったの一人しかいなかった。その彼
氏は、大学一年生の時に仲の良い友達に強引
に誘われて参加したコンで知り合った二つ
年上の男性で、それから二年ほど健全な交際
が順調に続いたが、美玲の方の気持ちが悪

だん冷めていき、自然消滅のような形で彼氏
と別れてしまったのだった。それからずっと
美玲には彼氏はいなかった。大学生を送る
中の色んな場面で、男性からの誘いや告白は
多くあったが、美玲は大学生には珍しく彼氏
が欲しいという強い気持ちもなく、本当に心と
きめく相手との出会いもなく、男性からの誘
いの数々をすべて断っていた。恋よりもつ
とやりたいことが自分にはある、美玲はそん
なふうに関心の中でずっと思っていた。だから
周りの友人達が必死に恋を探して彼氏を作っ
て楽しんだりしている姿を見ても、あまり羨
ましいとも思わなかった。
「私が美玲だったら、絶対に彼氏をたくさん
作って遊びまくるよ」
仲の良い友達からそんなふうにかかれる
ことも良くあったが、美玲にはそんな友達
の思考が良く理解できなかった。彼氏をたくさ
ん作ってどうするの？遊びまくるって何をす
るの？そんなふうに思っていたのだ。

美玲の両親は、父親が大学病院の勤務医で、母親は元高校教師だった。そのため教育熱心な厳格な家庭環境で七歳年下の弟と共に育てられた。「誰かの役に立つ人になりなさい」それが美玲が幼い頃から両親に言い聞かされていた教えだった。

誰かの役に立つ人になりなさいという両親の教えを素直に心に沁み込ませていた美玲は小学校から高校までの学生生活の間にクラス委員長や生徒会長、部活のキャプテンなどの様々な責任ある立場に率先して自ら手を挙げて就き、周りの生徒や先生の役に立つ活動をしてきた。そして周りの人から感謝されたり、喜んでいる姿を見て、誰かの役に立っている時間でもあった。

そんな美玲だったが、大学に入ってからはその実感をずっと見失っていたのだ。自分はまだ普通に生活しているだけだ。誰の役にも立っていないのではないだろうか。もっと誰か

に感謝をされたり、喜ばれるような生き方を
しなくちゃいけない、そんなふうに関心の底で
日々葛藤していた。だから、周りの友達が毎
日をただ楽しければ良いと思いつながら過ごし
ていることにも疑問を抱いていたのだった。
そんなある時の事だった。美玲は大学の学
生課に張り出されているアルバイトの求人広
告を友達と何気なく眺めていた。他の友人
達は、なるべく時給が良くて、華やかで楽な
バイトを探している中、美玲はある一つのボ
ランティアの張り紙に目が留まった。それは
高齢者施設での一週間限定のボランティア活
動だった。ボランティアのため全くの無給で、
それに高齢者施設という事で華やかさの欠片
もなかった。ただ、広告に記載されていた「
誰かの役に立ちたいと考えているあなたから
の応募をお待ちしております」というフレー
ズに惹きつけられてしまったのだ。

美玲は迷うことなくすぐにそのボランティア
アに応募した。この仕事をすれば少しでもず
っと抱えていたモヤモヤした想いを解消でき
るはずと思っただ。
数日後、美玲は大学から電車で三十分ほど
の場所にある有料老人ホームにいた。大学の
学生課でボランティアに応募してから、簡単
な面談を受け、トントン拍子で採用が決まり、
この日がボランティアの初日だった。
「こんにちは」
緊張して待つ美玲の元に現れたのは、三十代
後半くらい歳の北原という女性だった。
「はじめまして。松岡美玲です。宜しくお願
い致します」
美玲が礼儀正しく挨拶をすると、北原は感じ
よく微笑んだ。
「こちらこそ宜しくね」
美しく品のある女子大生の姿に、北原は好印
象を抱くと同時に、心の隅では同性としての

嫉妬を抱いていた。北原も清楚な印象の女性ではあったが、若さも美貌も華やかさもどれも美玲には到底敵わなかった。そのため、世間知らずのお嬢様がきつと興味本位でこんな場所になぜわざわざボランティアに来たんだわ、と内心では思っていた。しかし、北原はそんな想いは一ミリも示すことなく優しい態度で美玲に仕事の説明と、老人ホームの施設の内をやるのだった。

美玲が一週間ボランティアすることになった。た老人ホームは、住宅型有料老人ホームと呼ばれる比較的元氣なお年寄り達が暮らす民間の施設だった。綺麗な施設内を歩いていると、ちやうど美玲の祖母くらいの年齢の人達が休憩スペースで語り合ったり、一人で読書をしたり、友達同士でレクリエーションを楽しんだりしている姿があった。

美玲の祖母は、父方の方は二人ともまだ健在だったが、母方の祖父は一年前に長い闘病生活の末に亡くなっていた。母方の祖父に

は美玲がまだ幼い頃から一番良く遊んでもらった記憶があり、美玲は母方の祖父のことが大好きだった。そのため、祖父の闘病中には良く祖父の家にお見舞いにも行き、祖父の最後の時まで献身的に看病した。ただ、美玲には一つだけ後悔していることがあった。それは祖父が生前に美玲と一緒に何処かに旅行に行きたいと言っていた願いを叶えてあげられなかったのだ。美玲は、祖父が少しでも元気になれば絶対に願いを叶えるつもりでいたが祖父の体調は家族の想像以上に悪化していき結局祖父は最後の願いを叶えることなく逝ってしまった。

祖父が最後の願いを美玲に伝えた時に、何処でもいいからすぐに連れて行ってあげていたら、祖父の願いを叶えてあげられたかも知れない。どうしてあの時、私はすぐに祖父の願いを叶えてあげようとしなかったのだろう。大好きだった祖父が亡くなってから、美玲は後悔の念に駆られ、自分の不甲斐無さを責め

続 け て い た 。 そ し て そ の 思 い は 今 も ま だ 美 玲
の 胸 の 奥 に あ り 、 そ れ が 今 回 の ボ ラ ン テ ィ ア
に 応 募 さ せ た 動 機 の 根 幹 で あ る か も 知 れ な か
っ た 。
施 設 の 中 を 一 通 り 案 内 さ れ た 美 玲 は 、 北 原
か ら ボ ラ ン テ ィ ア と し て 行 う 仕 事 の 説 明 を 受
け た 。
施 設 の 一 階 に は 入 居 す る お 年 寄 り 達 が 利 用
す る 食 堂 が あ り 、 そ こ の テ ー ブ ル 拭 き な ど の
簡 単 な 掃 除 、 施 設 内 を 見 回 り 急 に 具 合 が 悪 く
な っ た り し て 倒 れ て い る お 年 寄 り が い な い か
を 確 認 す る こ と 、 そ し て 一 番 メ イ ン と な る 仕
事 は 、 施 設 内 を 巡 回 し て お 年 寄 り 達 に 声 を 掛
け て 、 彼 ら の 話 し 相 手 を し て あ げ る こ と だ っ
た 。 施 設 内 に は 美 玲 く ら い の 年 齢 の 孫 を 持 っ
た お 年 寄 り 達 が 多 く 入 居 し て い る の で 、 普 段 家
族 や 孫 と な か な か 会 え な い お 年 寄 り た ち を 喜
ば せ て あ げ る こ と が 一 番 の 目 的 だ っ た の だ 。

北原の説明では、この施設には色々なお年寄りが暮らしていて、中には家族が一度も会いに来ない人や、施設内に友達もいないていつも一人で寂しそうにしている人、体の具合が悪くて部屋に籠りがちな人などがいるらしいかった。そうしたお年寄り達に積極的に声を掛けてコミュニケーションを取り、閉ざされたと心を少しでも和ませてあげて欲しいというのが北原からの要望だった。

「分かりました。頑張ります！」

美玲は女子大生らしくガッツポーズを作って見せると、北原は優しく微笑みながら「それじゃあ一週間よろしくね」と声を掛けて事務所へと戻っていった。

美玲は早速、施設内の巡回を始めた。幼い頃から祖父母と仲の良かった美玲は、お年寄り達にも特に抵抗はなく、どんどん声を掛け、お爺ちゃんお婆ちゃん達と仲良くなろう、そう思った美玲は、休憩スペースで楽しそう

に世間話をしているお年寄り達の元に行き笑
顔で声を掛けた。
「こんにちは」
施設内では見慣れない若くて美しい女性に声
を掛けられたお年寄り達は、少し驚いた様子
で美玲の方を見ながらも、孫くらいの歳の美
玲を快く受け入れてくれて、他愛ない話を楽
しむのだった。
美玲が女子大生で、一週間この施設にボラ
ンティアとして来ることを話すと、お年寄り
達は皆感心した。
「あなた若いのに偉いわね」
「ほんと、こんな年寄りばかりの場所にボ
ランティアで来るなんて大したもんだ」
「ウチの孫も大学生だけど、遊んでばっかり
で親も困ってるのよ」
「私の孫にも、あなたの爪の垢を煎じて飲ま
せたいわ」
「それにしても、あなた綺麗ね。お人形さん
みたいだわ」

「あなたみたいなのが綺麗な子を見てるとこつちも元気になるよ」

お爺さん達やお婆さん達は、そうやって美玲の事をまるで砂漠に降臨した女神かのように褒め称えた。美玲はそれらの言葉に照れくさそうにしながら、自分が少しでもお年寄り達に元気を与えられたらと思いい、笑顔で彼らの話を聞いてあげた。

美玲が休憩スペースでお年寄り達と楽しそうに話をしていると、いつしか、とても綺麗な若い女の子がいるという噂がお年寄り達の間に広まり、一階の休憩スペースには大勢のお年寄り達が集まって来ていた。そして、美玲を見つめるお年寄り達の眼差しは、やはり自分の孫を見るような優しいものが多かったが、中には美玲の事を性的な対象として厭らしい欲望を秘めたギラギラした視線で見つめるお爺さん達や、自分にはもう二度と手に入らない若さと美しさを兼ね備えた美人女子大

生を嫉妬に満ちた眼差しで見つめるお婆さん達もいた。

大勢のお年寄り達に囲まれて、休憩スペースで一時間近く美玲が談笑していると、だんだんお年寄り達も打ち解けてきたのか、お爺さん達だけでなくお婆さん達までもが美玲の細く伸びた腕を撫でたり、肩に手を回してきたり、ついには太ももまで撫でてくるのだった。

「あっ、やめてください」

隣に座っていたお爺さんの手がスカートの中
に伸びてこようとして、美玲は思わず抵抗し
た。すると、手を伸ばしたお爺さんはつまら
なそうな顔で「ちよつとくらい触らせてくれ
ても良いじゃないか」とふてくされると、近
くにいたお婆さんに「お触りはダメですよ！
と叱られ、周りにいたお年寄り達から笑いが
起きた。」

「すいみません。私、他にも見て回りたいので」

お年寄り達の好奇心に満ちた視線がだんだん気
になり始めてきた美玲はそう言うとき、大勢の
お年寄り達の間を掻き分け、逃げるように休
憩スペースを後にした。
美玲は、隣に座っていたお爺さんの手がス
カートの中に伸びてきたことがショックだっ
た。美玲にとってお年寄り達は人生の大先輩
であり慈しみを持った尊い存在だと思ってい
た。それがまさか自分の体を触るなどという
卑猥な行為をしてくるとは想像もしていなか
ったのだ。美玲は困惑しながら、心の中の動
揺を振り払うかのように施設の中を急ぎ足で
歩いていった。すると二階の廊下の突き当たり
に置かれた二人掛けのソファで苦しそうに横
たわるお爺さんの姿があった。その様子から
して発作でも起きたのかも知れないと思っ
た美玲は慌ててそのお爺さんの元に駆け寄り
声を掛けかけた。
「大丈夫ですか？どうかしましたか？」

美玲がお爺さんの横にしゃがみながら話し掛ける。と、お爺さんは苦しそうな声で呟いた。「急に腰が痛くなつたんだ。悪いけど部屋まで連れて行つてくれないか」

と美玲にお願いした。

「分かりました」

美玲はお爺さんに肩を貸し、お爺さんを支えながら二階にある彼の部屋まで一緒に歩いた。お爺さんの部屋は十二畳ほどの部屋が一つあるワンルームタイプで、部屋の中には大きなベッドが置かれていた。そして、お爺さんをベッドまで連れてきて横にならせた美玲は様子を窺った。

「具合はいかがですか？まだ辛いですか？」

するとお爺さんは美玲を安心させるように「大丈夫、大丈夫、心配かけたね、ありがと」「あ、の、もし良かったら、私ももう少しここに居ても良いですか？」

美玲は一人でこの部屋で生活するお爺さんの事が心配だった。また具合が悪くなったりしないか、それに一人で寂しいのではないか、さつきまで休憩スペースにいた大勢のお年寄り達とは違う孤独な雰囲気、このお爺さんには感じられた。―ありがとう、それなら少しここに居てくれるかな―

お爺さんは嬉しそうな顔で美玲に答えた。それから美玲はお爺さんのベッドの横に置かれた椅子に座り、お爺さんを元気づけてあげようと明るくどんどん話し掛けていった。さつき一階の休憩スペースで大勢のお年寄り達に話したように、自分が女子大生で、今日から一週間この施設でボランティアすることになった事を伝えると、お爺さんも自分の身の上話を美玲に語り始めた。

そのお爺さんは七十二歳で名前を西田弘といった。四十代の頃に離婚して妻子と別れ、それ以来ずっと一人で生活していたが、六十

歳で仕事を退職したのを機に、この施設に入居したらしかった。ここに入ったのは、老後の孤独を紛らわすのが目的だったが、元々、人付き合いがそれほど得意な方でもなく、入居して十二年経った今でも友達と呼べる人はここにはおらず、そのため、あまり大勢が集まる休憩スペースに行ったり、食堂に行く事もなかった。食事はすべて自分の部屋で済ませ、施設内で息抜きをする時には、あまり人の来ないフロアの隅に置かれたソファで寛いでいたのだ。

西田は日頃ほとんど人と話をしたりする機会がないせいにか、久しぶりに出会った話し相手の美玲に、堰を切ったかのような勢いで自分の話を延々と続けた。そして美玲はそんな西田の話に退屈するような素振りを一ミリも見せることなく、西田の目を見ながら時には相槌を打ち、時には笑い、真摯な姿勢で話を聞いてあげていた。

そうして西田が身の上話を一通り終えた頃、
ふいに寂しそうな表情を浮かべて黙り込んだ
のだった。一体どうしたんだろう。美玲は西
田のただならぬ様子に心配になり、優しく声
を掛けた。
「どうかしたんですか？」
すると西田はポツリと呟いた。
「私はもうすぐ死ぬんだよ」
「えっ？」
西田の思いがけない言葉を聞いた美玲は啞然
とした。
「後もって半年くらいの命だつて医者から言
われているんだ」
「そんな・・・」
美玲はなんて言葉を返したら良いのか分から
なかった。
「ここで一人していると、人生で色んなやり残
した事ばかりが浮かんでね。あれもすれ
ば良かったとか、これもすれば良かったとか
後悔ばかりだよ」

西田は寂しそうに一点を見つめていた。
「でも、今日はあなたみたいな若い人と話
できてとても楽しかったよ。ありがとう」
西田に切なそうな笑顔で御礼を言われると美
玲は思わず涙ぐんでしまった。もうすぐ死ぬ
と分かっていて日々を過ごす事がどれほど苦
しいことなのか、想像するだけで、それは計
り知れないことのようには思えた。なのに、自
分に対して笑顔でありがとうと言ってくれた
美玲は西田の胸中を察すると耐えられなかつ
た。
「あ。あ。あ。私に何かできることはあります
か？私で良ければ何でもします」
美玲は涙を必死に堪えて、そう告げた。
「何でもしますって言われても・・・」
西田は美玲の優しい言葉にグツときたのか、
しばらく黙りこみ何かを考えている様子だっ
た。
「本当に何でもしてくれるのかい？」

西田は美玲の澄んだ目を見ながら、念を押すように問い掛けた。

「はい、私が出来る事なら何でもします！」

美玲は迷うことなくそう言い切った。

「それじゃあ、死ぬまでにどうしても叶えた
いことがあるんだけど、お願いしてもいいかな？」

「はい、何でも言っして下さい！」

「私は、妻と別れてからずっと女の人と付き合ったこともないんだ。それで・・・」

西田はそこまで言うと言葉を詰まらせた。

「それでどうしたんですか？遠慮しないで話してください」

美玲は、躊躇った様子の西田を優しく諭した

「それで・・・、死ぬまでもう一度、女の人の体を見たいんだ」

美玲にはその言葉の意味が良く分からず、ただじつと西田の顔を見ていた。

「あなたの裸を見せてくれないかな」

西田は至って真面目な顔で美玲にそう問い掛けるのだった。
「えっ？」
自分の祖父と変わらないくらいの歳のお爺さんが、自分の裸を見たいと言った事に、美玲は驚いた。
「もう、冗談は止めてくださいよ」
美玲は、それは西田の本心ではなく、単に自分をからかっているだけだと思った。しかし西田は真顔で続けたのだ。
「冗談なんかじゃないよ。死ぬまでもう一度あなたみたいな美しい女性の裸を間近で見てみたいんだ」
その顔は真剣そのもので、死を間近に控えた老人の鬼気迫る思いが伝わってきた。
「そんな・・・」
美玲はようやく西田が本気で自分の裸を見たと言っていることに気づいた。それは美玲にとってはあまりに衝撃的だった。まさかこんなお爺さんが孫くらいの年齢の私の裸を見

たいなんて、どうして？嫌悪感と共に言いよ
うのない悲しさが込み上げてきた。
「幾らなんでもそれはできません！いい加減
にして下さい！」
それまで優しくかった美玲だが、我慢できなく
なり思わず強い口調で言うのと、西田は急に悲
しそうな表情をした。
「すまない。あなたがずっと優しく私の話を
聞いてくれていたんで、つい本音が出てしま
った。怒らせてしまったね。今のことはもう
忘れてくれ」
そして西田は、美玲の方に背中を向けると、
そのまま布団を深く被り、ベッドの上で静か
に横たわった。
美玲は、ひどく落ち込む西田の姿を見て、
つい自分も感情的になってしまった事を反省
しながらも、これ以上西田に掛ける言葉が見
つからず、「失礼します」とだけ言って、部
屋を後にしたのだった。

■ 海老沢薫 B L O G

<http://kaoruebisawa.blog.fc2.com/>

・ ・ ・ 「羞恥」 「露出」 「辱め」 をテーマとした小説シリーズや、各種コンテンツ情報などを配信。

■ 海老沢薫 Web 連載小説

『 清楚な美人妻 彩 27 歳 絵画モデル編 』

<https://regimag.jp/bo/book/detail/?book=9281>

『 清純派女優 結衣 24 歳 ー 国民のペットへと堕ちていくヒロイン ー 』

<https://regimag.jp/bo/book/detail/?book=18802>

『 清純派女優 結衣 24 歳 ー 女神の憂鬱 ー 』

<https://regimag.jp/bo/book/detail/?book=26675>

『 女教師 玲奈 25 歳 ー 女性教諭の前代未聞の不祥事 ー 』

<https://regimag.jp/bo/book/detail/?book=17186>

『 美人社長 里帆 26 歳 ー 若き女社長のプライドを砕く屈辱の契約 ー 』

<https://regimag.jp/bo/book/detail/?book=18885>